

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿
農業資材販売等関係者

福岡県病虫害防除所長

平成20年度病虫害発生予報第4号(8月)について

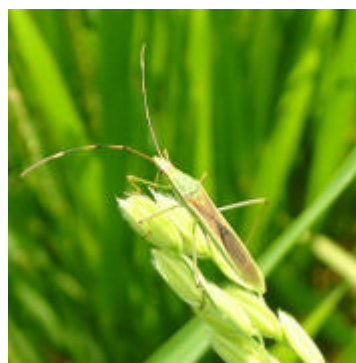
このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

斑点米カメムシ類の防除を徹底しましょう！！

近年、米の品質低下をもたらす問題となっている斑点米カメムシ類が多発しています。水田周辺の雑草地からの飛来を防ぐために出穂2週間前までに草刈りを行って下さい。防除適期は穂揃期とその7～10日後です。防除を徹底しましょう。



ミナミアオカメムシ



クモヘリカメムシ



ホソハリカメムシ



トゲシラホシカメムシ

予報第 4 号

向こう 1 か月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

| 作物名 | 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (予想) | |
|-------------|---------------------|-------------|-------------|-----|
| | | 平年比 | 平年比 | 前年比 |
| 水稲 | いもち病 (葉いもち・穂いもち) | 並 | やや少 | やや多 |
| | 紋枯病 | 並 | 並 | 並 |
| | トビイロウンカ | 少 | 少 | 少 |
| | コブノメイガ | やや少 | やや少 | やや少 |
| | 斑点米カメムシ類 | 多 | 多 | 多 |
| 大豆 | ハスモンヨトウ | - | やや多 | やや多 |
| かんきつ | 黒点病 | 並 | 並 | 並 |
| | かいよう病 | 並 | 並 | 少 |
| | ミカンハダニ | やや多 | 多 | 多 |
| なし | ナシヒメシンクイ | やや多 | やや多 | やや多 |
| ぶどう | べと病 | やや多 | やや多 | 並 |
| かき | 炭そ病 | やや少 | やや少 | 並 |
| | フジコナカイガラムシ | 並 | 並 | 並 |
| | ハマキムシ類 | 並 | 並 | 並 |
| 果樹共通 | カメムシ類 | 並 | - | 多 |
| 茶 | 炭そ病 | 少 | 少 | 少 |
| | 輪斑病 | 並 | 並 | 多 |
| | カンザワハダニ | やや多 | 多 | 並 |
| | チャノコカクモンハマキ | 少 | 少 | 並 |
| | チャノホソガ | 少 | 少 | 並 |
| | チャノミドリヒメヨコバイ | 並 | 並 | 少 |
| チャノキイロアザミウマ | 多 | やや多 | やや多 | |
| イチゴ | 炭そ病 | やや少 | やや少 | 並 |
| | ハダニ類 | 並 | 並 | やや多 |

注) 果樹共通 カメムシ類の発生量(現況)は前年比

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう 1 か月の気温は平年より高いでしょう。降水量は少なく、日照時間は並か多いでしょう。

週別の気温は、1 週目、2 週目及び 3 ~ 4 週目ともに高いでしょう。

要素別確率

| 要素 | 低い (少ない) | 平年並 | 高い (多い) |
|------|-------------|-----|------------|
| 気温 | 10 | 30 | 60 |
| 降水量 | 40 | 30 | 30 |
| 日照時間 | 20 | 40 | 40 |

(福岡管区气象台 20年7月25日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 水稻】

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（ ± ）。

発病株率 5.0%（平年 6.1%、前年 0.4%）

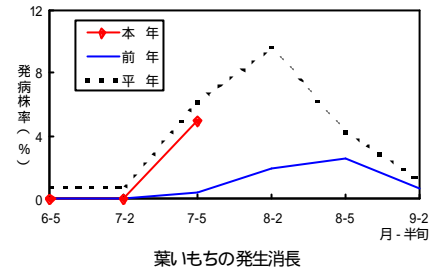
イ 葉いもちの病斑は停滞型が多かった（ - ）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている（ - ）。

(3) 防除上の注意

ア 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合は、粉剤は出穂直前、粒剤は出穂2週間前の処理となっており、剤型によって散布時期が異なるので注意する。

イ 薬剤については「平成20年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する（以下の病害虫についても同様）。



葉いもちの発生消長

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

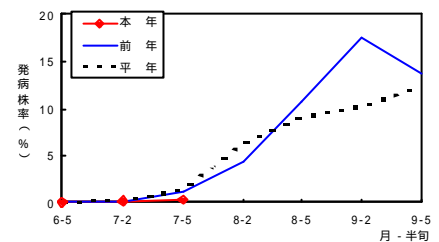
ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（ ± ）。

発病株率 0.3%（平年 1.4%、前年 1.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

出穂期以降、病斑の上位葉への進展を防ぐため、発生ほ場では防除を実施する。粉剤は出穂10～14日前の防除効果が高い。粒剤は、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので各々の使用基準を確認して使用する。



紋枯病の発生消長の推移

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（ - ）。

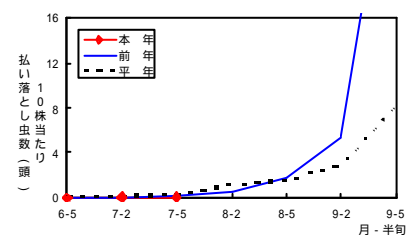
10株当たり成幼虫数 0.03頭（平年 0.3頭、前年 0.1頭）。

イ 県下5地点の予察灯による7月5半旬までの誘殺虫数は3頭（平年 43.9頭、前年 47.0頭）で極めて少なかった（ - ）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高いとされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

ア 本種は低密度であっても増殖率が高いため、必ずほ場での発生状況を把握する。また、防除所の発生パターン図を参考に最適防除時期（幼虫ふ化揃い期）を決める。



トビイロウンカの発生の推移

- イ 箱施薬剤が施用されたほ場では、残効がなくなっている恐れがあるため本種の発生に注意する。無防除田においては本種の発生状況を十分に把握する。
- ウ 本種は株元に生息しているため、防除の際は薬剤が株元に十分かかるように丁寧に散布する。

4 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5 半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

食害株率 2.6% (平年 7.3%、前年 22.9%)

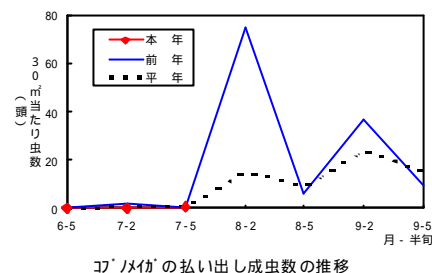
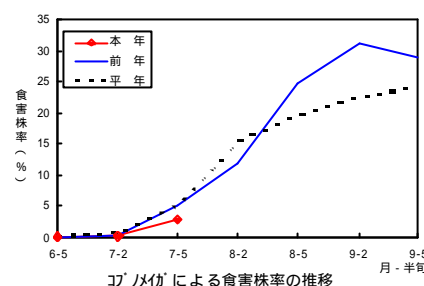
30m²当たり払い出し成虫数 0.7頭 (平年 0.6頭、前年 0.4頭)

イ 向こう1 月の気象予報では、気温は平年より高いとされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 各ほ場における発蛾最盛期及び発生量を把握して最適防除時期を決定する。

イ 最適防除時期は、粒剤では発蛾最盛期頃、粉剤では発蛾最盛期から1 週間後が効果が高い。また、粒剤を施用する場合は効果を安定させるため散布後7 日間止水する。



5 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5 半月調査(雑草地での20 回すくい取り)の結果、発生量は平年より多かった(+)。

主要3 種カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類) 11.4頭 (平年 5.5 頭、前年 3.3頭)

カスミカメ類34.5頭 (平年 22.9頭、前年 7.0頭)

ミナミアオカメムシ0.16頭 (過去5 か年平均 0.01 頭、前年 0頭)

イ 県下5 地点の予察灯における7月5 半月までのミナミアオカメムシ誘殺虫数は237頭 (過去5 か年平均 44.2頭、前年133頭) と極めて多く、アカスジカスミカメについても、2,034頭 (過去5 か年平均 1,369頭、前年1,449頭) と多い(+)。

ウ 向こう1 月の気象予報では、気温は平年より高いとされている(+)。

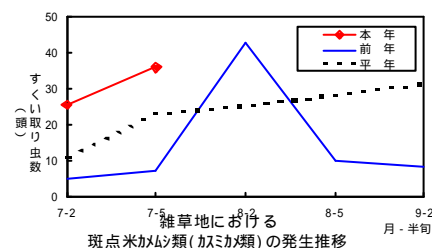
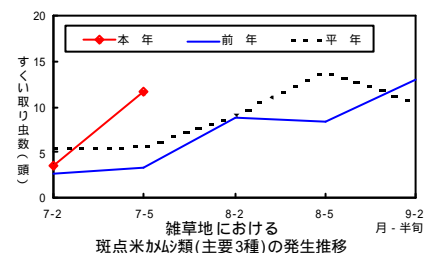
(3) 防除上の注意

ア 出穂直前の除草は本田内に追い込むことになるので、出穂2 週間前までに畦畔や休耕田などの雑草管理を徹底する。

イ 防除適期は穂揃期及びその7 ~ 10 日後である。

ウ 出穂の早いほ場では集中的に加害する恐れがあるため、発生状況に特に注意する。

エ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフエン剤の防除効果が低いので、効果の高いクロチアニジン剤又はジノテフラン剤等を使用する。



【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 県下3地点の7月1半旬～5半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は788頭（平年1,646頭、前年1,888頭）とやや少なかった（-）。

イ 7月5半旬調査において、一部のほ場で平年より早く白変葉の発生を認めた（+）。

ウ 梅雨明けが7月6日頃と早く、適期に播種がされており生育が良好であるため、本種の発生に好適条件である（+）。

エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている（+）。

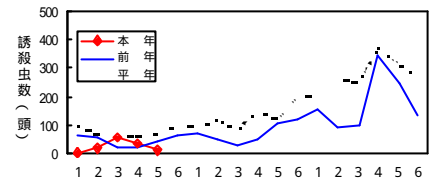
(3) 防除上の注意

ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。

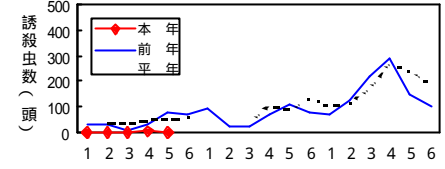
イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。

ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから

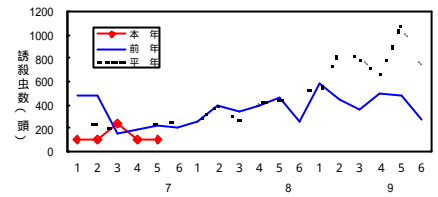
10日目頃であるが、地域によって発生に差があるので正確な防除時期の判断は、白変葉の発生状況を確認して行う。



ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数⁹
(筑紫野市) 武田式乾式トラップ



ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数⁹
(筑後市) 武田式乾式トラップ



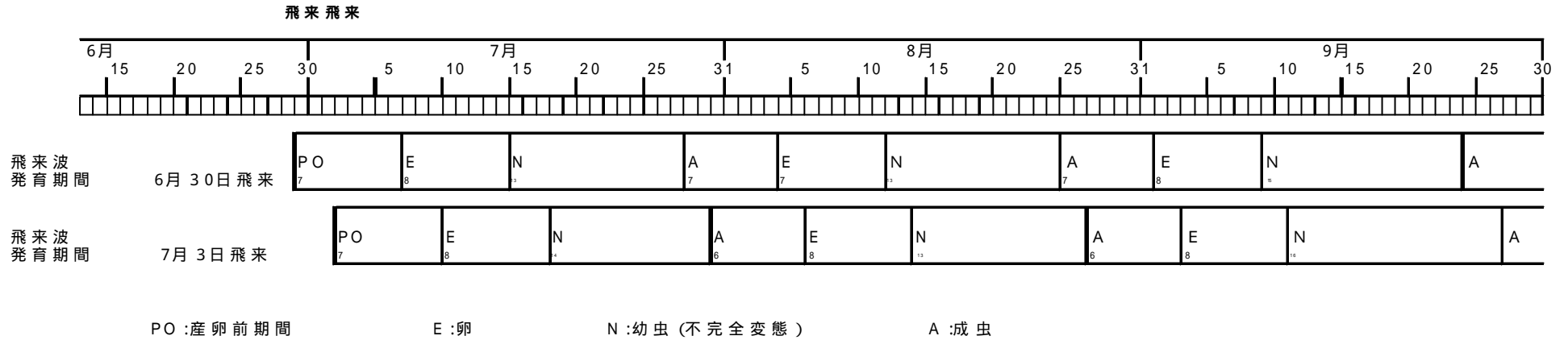
ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数⁹
(行橋市) 武田式ファイル式トラップ

【普通作・その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (予想) | | 防除上注意すべき事項等 |
|-----------------|-------------|-------------|-----|-------------|
| | 平年比 | 平年比 | 前年比 | |
| 普通期水稻 セジロウンカ | 少 | 少 | 少 | |

H20年

飛来に基づくトビロウソク発生予想パターン図

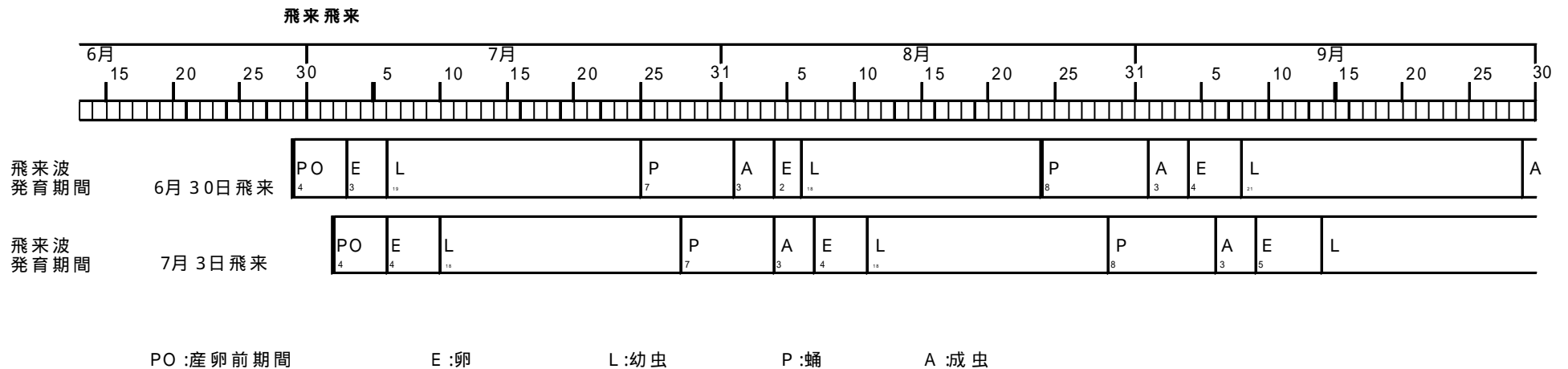


(注)

- (1) 気温は太宰府市の平均気温を使用した
- (2) 平均気温は7月24日までは本年のデータ、7月25日以降は前10か年平均値

H20年

飛来に基づくコブノメイガ発生予想パターン図



(注)

- (1) 気温は太宰府市の平均気温を使用した
- (2) 平均気温は7月24日までは本年のデータで、7月25日以降は前10か年平均値
- (3) コブノメイガはウンカ類と同時期に飛来したと推定

【果樹】

1 かんきつ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 1.0% (平年 2.1%、前年 0.3%)

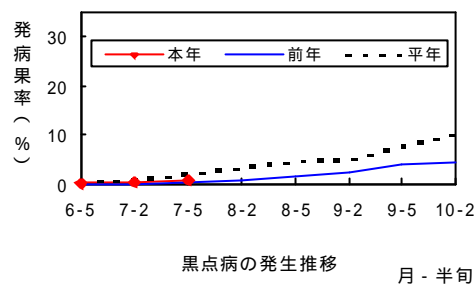
発生ほ場率 31.3% (平年35.5%、前年23.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 感染源である枯れ枝は極力除去する。

イ 前回の散布から25日又は積算降水量250mmを目安に降雨前の予防散布を徹底する。



2 かんきつかいよう病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

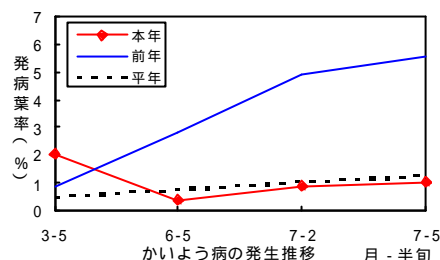
温州みかんの発病葉率 1.0% (平年 1.3%、前年 5.6%)

発生ほ場率 31.3% (平年 14.7%、前年 58.8%)

温州みかん発病果率 0% (平年 0.4%、前年 2.2%)

発生ほ場率 0% (平年 13.1%、前年 29.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。



3 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

寄生葉率 18.9% (平年11.8%、前年 2.1%)

発生ほ場率 75.0% (平年56.9%、前年 35.3%)

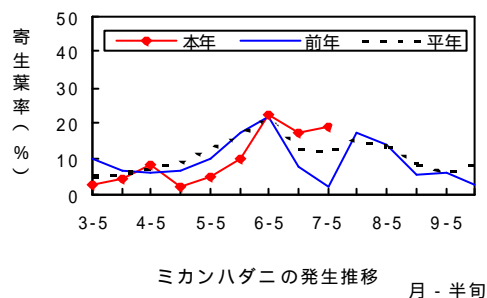
イ 梅雨明けが早く、その後も少雨傾向で経過し、本種の増殖に好適な条件が続いている(+)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 なしのナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

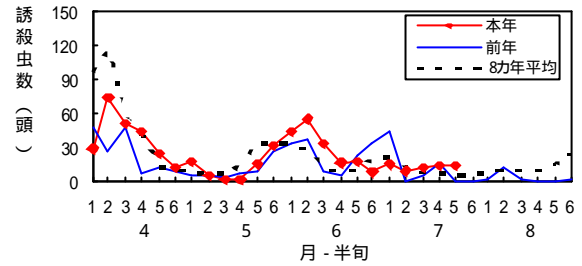
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

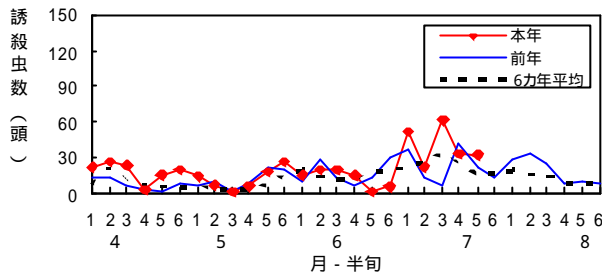
ア 7月1～5半旬までのフェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや多かった(+)。

(県内3か所の平均)

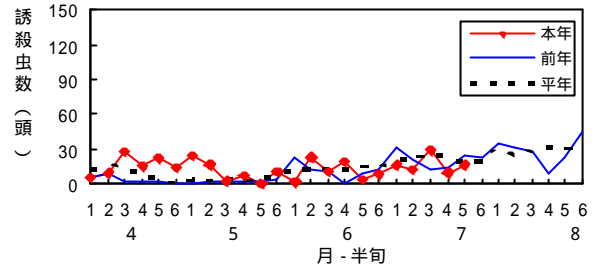
117頭(平年 103頭、前年 95頭)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(朝倉市杷木)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(筑後市和泉)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(黒木町)

イ 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

被害果率 0.8%(平年 0.4%、前年 0.2%)

発生ほ場率 58.3%(平年 18.9%、前年 14.3%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で8月上旬から中旬頃、山間地域で8月中旬から下旬頃と予想される。

イ 発蛾最盛期直後を目安に防除を行う。発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、更に7～10日後に追加防除を行う。

ウ 幼虫は主に果頂部から食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

エ 収穫期に入る品種もあるので、防除に当たっては農薬使用基準を確認し薬剤の選定に注意する。

5 ぶどうべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発病葉率 21.8%(平年 10.9%、前年 21.6%)

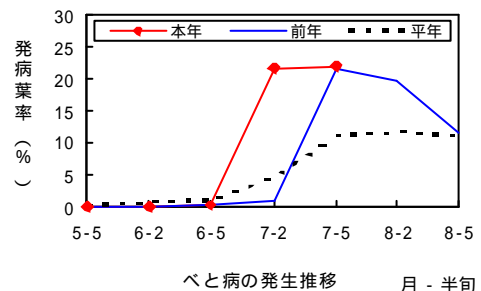
発生ほ場率 76.9%(平年 69.4%、前年 91.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉は除去する。

イ ボルドー液の散布は、降雨直後の雨滴や散布直後に降雨があると薬害が発生するので注意する。



べと病の発生推移 月-半旬

6 かき炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病枝率 0.4% (平年 1.0%、前年 1.2%)

発生ほ場率 20.0% (平年 30.5%、前年 41.2%)

発病果率 0.1% (平年 0.7%、前年 0.4%)

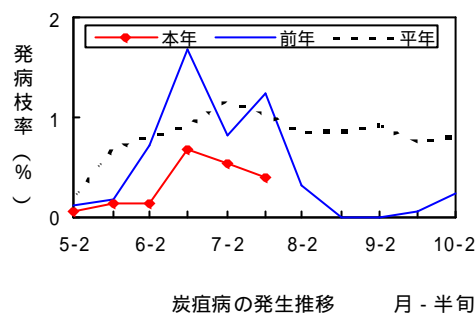
発生ほ場率 6.7% (平年 27.5%、前年 17.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である罹病枝及び罹病果は、除去する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合や罹病枝の多い園及び本病に弱い早秋栽培園は薬剤防除を徹底する。



7 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生果率 7.9% (平年 7.4%、前年 8.4%)

発生ほ場率 80.0% (平年 70.0%、前年 76.5%)

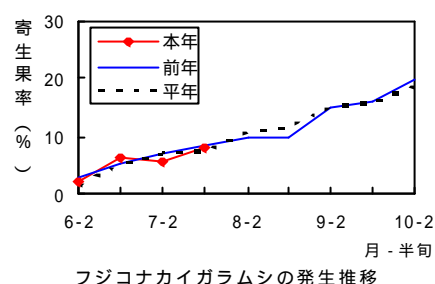
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除の効果が最も高いのは若齢幼虫期であるが、第2世代以降は齢期が乱れているので、園内をよく観察して適期防除を実施する。

イ 防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 合成ピレスロイド系剤は、本種の天敵類に悪影響を及ぼすのでカメムシ飛来時以外は極力使用を控える。



8 かきのハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

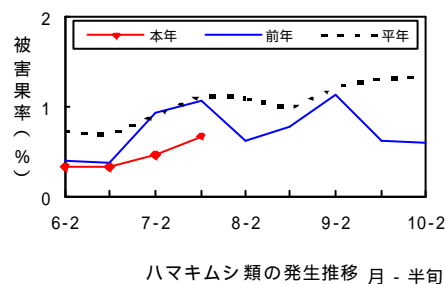
被害果率 0.7% (平年 1.1%、前年 1.1%)

発生ほ場率 40.0% (平年48.8%、前年47.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

本虫は、ヘタの下や葉と重なった部分に多く寄生するので、果実表面に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



9 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年（少発生）より多

(2) 予報の根拠

- ア 今年のヒノキ球果の着果量はやや多く、カメムシ類の餌の量は十分である(+)。
- イ 7月5半旬のヒノキ球果のビーティング調査(27か所)では、カメムシ類の寄生頭数は、1地点当たり13.5頭(県南地域25.3頭)と発生の少なかった前年(3.7頭)より多い(+)
- ウ 県下27か所の7月5半旬のヒノキ球果の1果当たり口針鞘数は2.1本(県南地域3.9本)、被害球果率は41.1%(県南地域81.1%)となっている(+)
- エ 7月5半旬調査の結果、一部のかき園で被害果が認められたものの、県下全体の発生量は少ない(-)。
なし 被害果率 0%(平年 1.0%、前年 0.4%)
かき 被害果率 0.1%(平年 0.7%、前年 0.1%)
- オ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 常習地域やスギ、ヒノキ林に近接する園地では、突発的な飛来が考えられるので果樹園内の見回りを強化し、園内への飛来や果実の落果等の異常を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
- イ 夜間の屋外電灯や電撃殺虫器等への飛来状況に注意し、発生が多い場合は薬剤防除を行う。
- ウ ヒノキの口針鞘数調査結果から、新成虫がヒノキから離脱し果樹園へ飛来する時期は、9月3日頃(県南地域は8月30日頃)と予想される。
- エ 樹種によって使用できる薬剤が異なるので、使用基準(作物登録の有無・使用回数等)を確認する。

【果樹：その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生現況 (平年比) | 発生予報 | | 防除上注意すべき事項等 |
|-------------|---------------|-------|-------|----------------------------|
| | | (平年比) | (前年比) | |
| なし ハダニ類 | 並 | やや多 | やや多 | 多発すると防除が困難になるので初期防除を徹底する。 |
| かき うどんこ病 | 少 | 並 | 並 | 葉裏に十分かかるよう散布する。 |
| 柿 ハダニガ | 並 | 並 | 並 | 発生が多い園では、8月上旬から中旬の防除を徹底する。 |

【茶】

1 炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病葉数 0.1葉(平年 3.2葉、前年 3.7葉)

発生ほ場率 8.3%(前年41.7%)

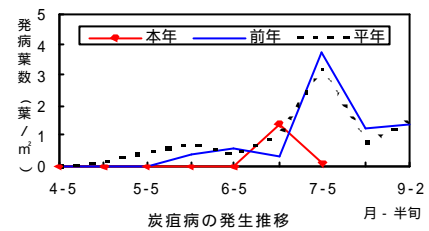
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 整枝後等の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。特に最終摘採後の新芽に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前の薬剤防除の効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0.26葉(平年0.27葉、前年0.01葉)

発生ほ場率12.5%(前年4.2%)

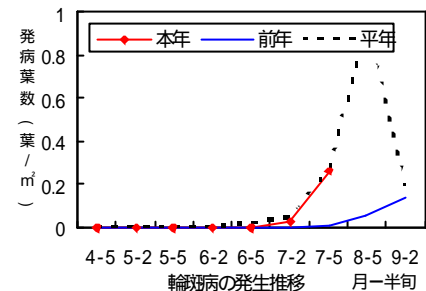
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 病原菌は、葉や茎の傷口から侵入するため、三番茶摘採又は刈落とし当日か翌日に防除を行う。

イ 台風等の強い風雨の後では、感染が急速に拡大する場合がありますので、降雨後速やかに(翌日までに)防除を行う。

ウ 本病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

寄生葉率 1.3%(平年 0.6%、前年 0.1%)

50葉当たり虫数1.9頭(平年 1.4頭、前年 0.1頭)

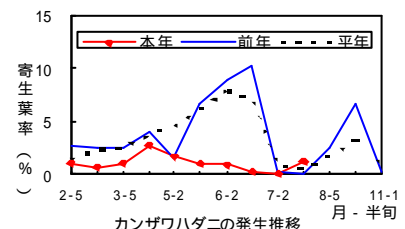
発生ほ場率 29.2%(前年 4.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップにおける7月1半旬から7月5半旬までの誘殺虫数は平年より少なかった(-)。

調査地点：筑後市 75頭 (平年 205頭、前年 93頭)

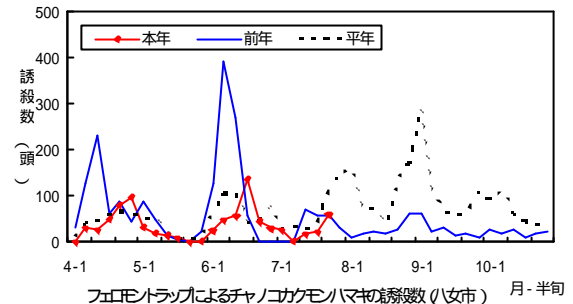
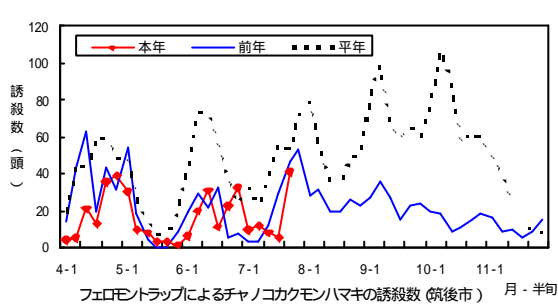
八女市128頭 (平年 251頭、前年 184頭)

イ 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害葉数 0.7葉(平年 0.4葉、前年 1.4葉)

発生ほ場率33.3%(前年 41.7%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)



(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は8月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、最盛期から7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップにおける7月1半旬から7月5半旬までの誘殺虫数は平年より少なかった(-)。

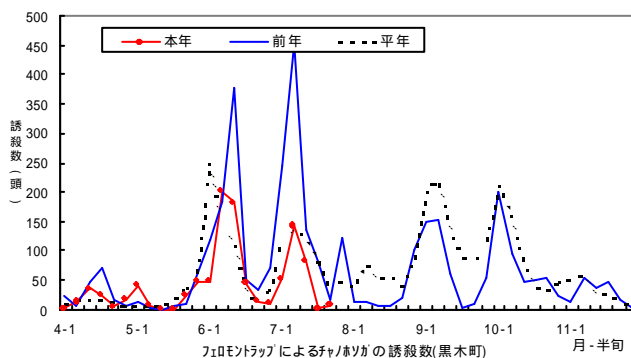
調査地点：黒木町 284頭 (平年 482頭、前年 929頭)

イ 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

被害葉数 0.6葉(平年 1.9葉、前年 0.1葉)

発生ほ場率 25.0%(前年12.5%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は8月中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、最盛期から7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が散見されたら直ちに防除を行う。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

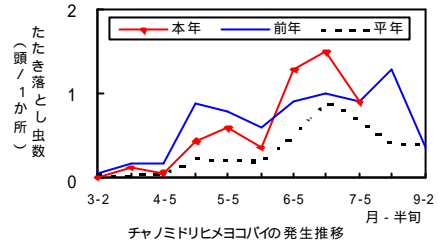
たたき落とし虫数0.9頭(平年 0.7頭、前年0.9頭)

発生ほ場率 75.0%(前年 75.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

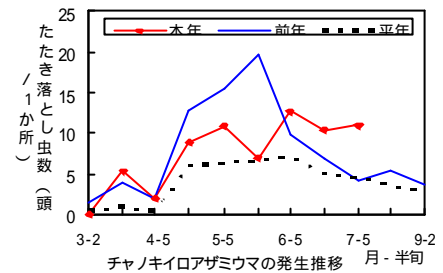
たたき落とし虫数11.0頭(平年 4.6頭、前年4.3頭)

発生ほ場率 100%(前年 70.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜】

1 イチゴ(育苗期)の炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

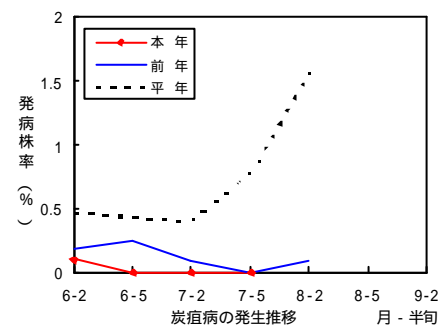
ア 7月5半旬調査の結果、発生は認めていない(-)。

発病株率 0%(平年 0.8%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源である罹病苗とその周辺の苗は、直ちに除去する。
- イ 夜冷短日や低温暗黒などの処理は、株へのストレスがかかり発病を助長するので、入庫前に確認し、感染が疑われる苗は使用しない。
- ウ 葉かぎ作業は晴天日に行い、降雨前後を中心に予防散布を行う。



2 イチゴ(育苗期)のハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 7.9%(平年 6.1%、前年 3.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされている(+)

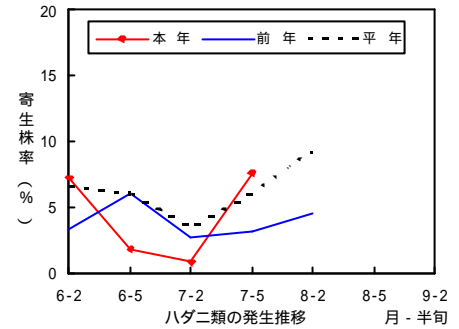
(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発後は防除が困難になるので、初期防除を徹底する。

イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ密封して処分する。

ウ 夜冷短日や低温暗黒などの処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、ハダニを持ち込まないように注意する。

エ ほ場内や周辺の除草を徹底する。



【野菜：その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生量 (現況) | 発生量 (予想) | | 防除上注意すべき事項等 |
|--------------------------|-------------|-------------|-----|---|
| | 平年比 | 平年比 | 前年比 | |
| アスパラガス 斑点性病害 | 少 | やや少 | 並 | 過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。 |
| アザミウマ類 | やや少 | やや少 | 並 | |
| ハダニ類 | 少 | 並 | 並 | |
| アブラムシ類 | やや多 | 並 | やや多 | ほ場内や周辺の除草を徹底する。 |
| 鱗翅目害虫 (ハモンボウ、 材外カ) | 並 | 並 | 並 | 8月以降発生が多くなるので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。 |
| 野菜共通 コナジラミ類 | 並 | 並 | やや多 | 野外(筑後市)に設置したトマト苗トラップによる捕獲数は平年並である。今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと。 |

| 日付 | 本年 | 前年 | 過去5カ年平均 |
|-------|----|-----|---------|
| 4/23 | 0 | 0 | 0 |
| 5/23 | 0 | 0 | 0 |
| 6/23 | 10 | 0 | 0 |
| 7/23 | 5 | 20 | 20 |
| 8/23 | 5 | 10 | 10 |
| 9/23 | 5 | 30 | 30 |
| 10/23 | 10 | 140 | 80 |
| 11/23 | 5 | 60 | 60 |
| 12/23 | 0 | 0 | 0 |

6月～8月は「農薬安全使用運動」の実施期間です 農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準値が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルを確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講ずるなど十分注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数などラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jppn.ne.jp